



寺口麻穂

ドギーパラダイス!

犬と人間の快適な生活



ペット・ロス (ペットとの永遠の別れ)

の犬を飼うことが多いようです。犬好きは一生犬なしの生活は無理なのかもしれません。愛犬を亡くした当日や翌日に次の犬を求めてシエルターに来る人もいれば、数年かけて心の整理をして次の犬を探す人もいます。次の犬を飼うのに「正しい」時期というのはありません。私は、心に任せて時期を決めれば良いと思っています。ただし、愛犬の死後、気持ちがつきれる前に、代わりを求めて次の犬を飼うことだけは避けてください。新しい犬との関係作りがきちんとできないだけでなく、犬にとってもフェアではないでしょう。

レインボー・ブリッジの下へ

アメリカでは、動物が死ぬと「レインボー・ブリッジの下へ行く」という言い伝えがあります。レインボー・ブリッジがかかるその場所は、草原が広がる緑の丘。光いっばいで、水も食べ物もふんだんにあるパラダイスのようなその場所で、たくさん動物たちがみんな仲良く幸せそうに追いかけて遊んで遊んでいるのだそうです。そして、そこから飼い主のことを見守ってくれるのだとか。私は「こんなに大好きなだから、私もその時が来れば、レインボー・ブリッジの下に行けるかな」と願っています。

犬もいろいろなストレスを感じて暮らしています。今回は、そんな犬のストレス・サインとリラックスできる環境作りについてお話ししたいと思いますので、どうぞお楽しみに!

算して大体1年に3〜5歳の割合で年を取っていきます。ですからたとえパピーの頃から飼った犬でも、愛犬の方が飼い主より先に旅立ってしまうのがほとんどです。13歳になる老犬と暮らす私は、ある程度冷静にその現実と向かい合い、その時期を迎える「覚悟」ができていくつもりですが、どうやら周りは、ジュリエットが旅立った後の私のことが心配で仕方ないようです。そんな折にシエルターで見つけてきたのが、ペットセメタリー(墓地)とクリメーション(火葬)のパンフレット。「縁起でもない」とは思わずに、いざという時の備えとして持っています。アメリカにはあちこちにペット専用の火葬・埋葬施設があり、個別火葬も可能です。インターネットでも検索できますが、行きつけの獣医に尋ねれば、紹介してくれるはずです。

愛犬との別れの後

ペット・ロスは、精神的だけでなく、肉体的にも飼い主に大きな打撃を与えることもあります。私の父親は、実家の愛犬ブルートが亡くなった後、それまで患っていた耳の病気が一気に悪化し、ほとんど聞こえなくなっていました。

愛犬を失った悲しみは人それぞれ。その悲しみを乗り越える方法も人によってさまざまです。それでも、心でできた大きな穴を埋めてくれるのはやはり犬。「この子が天国に行ったら、次は絶対に飼わない」と宣言していた人でも、次

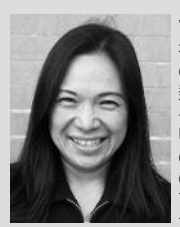
生き延びる時のために

犬は人間よりずっと寿命が短く、平均で15年。超大型犬のグレートデーンは平均8歳ですから、本当に短命です。生後1年強で赤ちゃんから一気に成犬へと成長し、そこからは犬種によりますが、人間に換



© Maris Stella

アメリカでは死んだ動物はレインボー・ブリッジの下へ行くと言われている



てらくちまほ
在米22年。かつては人間の専門家を目指し文化人類学を専攻。2001年からキャリアを変え、子供の頃からの夢であった「犬の専門家」に転身。地元のアニマル・シェルターでアダプション・カウンセリングやトレーニングに関わり、個人ではDoggie Project (www.doggieproject.com) というビジネスを設立。犬のトレーニングや問題行動解決サービスを提供しつつ、13歳になるピットブル、ジュリエットとニュージャーシーで楽しく生活中。ご意見・ご感想は: info@doggieproject.com